

しょうなん たかやなぎしんでんしょざいうまどて
沼南町高柳新田所在馬土手

— 高柳西部地区埋蔵文化財調査報告書 —



平成11年1月

住 宅・都 市 整 備 公 团

財團法人 千葉県文化財センター

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第348集として、住宅・都市整備公団の高柳西部地区開発事業に伴って実施した、東葛飾郡沼南町高柳新田所在馬土手の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、馬土手に伴う堀が確認されるなど、この地域の牧の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年1月20日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

凡　　例

- 1 本書は、住宅・都市整備公団千葉地域支社による高柳西部地区開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県東葛飾郡沼南町高柳新田字〆切内160-2に所在する高柳新田所在馬土手（遺跡コード305-004）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、住宅・都市整備公団千葉地域支社の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、北部調査事務所長 折原 繁の指導のもと、主任技師 沖松信隆が下記の期間に実施した。

発掘調査 平成10年4月6日～4月20日

整理作業 平成10年4月21日～4月30日

- 5 本書の執筆は、主任技師 沖松信隆が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、住宅・都市整備公団千葉地域支社千葉西部開発事務所、沼南町教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/200,000地勢図「千葉」「東京」(N 1-54-19、25)
 - 第2図 国土地理院発行 1/50,000地形図「佐倉」(N 1-54-19-14)
「東京東北部」(N 1-54-25-2)
 - 第3図 参謀本部陸軍部測量局作成（明治17年） 1/20,000迅速測図「小金町」
 - 第4図 沼南町役場発行 1/2,500都市計画図「20」「21」
- 8 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 10 挿図に使用した網かけの用例は、次のとおりである。



a層 墓褐色土ないし淡褐色土主体層



b層 黒色土主体層



c層 墓褐色土ないし褐色土主体層

本文目次

I	はじめに.....	2
1	調査に至る経緯.....	2
2	遺跡の位置と環境.....	2
3	馬土手の現況.....	5
II	調査の概要.....	8
1	調査の方法と経過.....	8
2	各トレンチの概要.....	8
III	まとめ.....	12

挿図目次

第1図	近世小金牧の範囲.....	2
第2図	遺跡の位置と周辺遺跡.....	3
第3図	遺跡周辺地形図.....	4
第4図	現在の遺跡周辺地形.....	5
第5図	高柳新田所在馬土手測量図.....	7
第6図	1トレンチ・2トレンチ.....	9
第7図	3トレンチ.....	10

図版目次

図版1	遺跡周辺航空写真
図版2	調査前全景1・2、1トレンチ断面・拡張部硬化面・拡張部溝
図版3	2トレンチ全景・溝全景、3トレンチ全景・拡張部溝

I はじめに

1 調査に至る経緯

平成10年3月、住宅・都市整備公団千葉地域支社と千葉県教育委員会は高柳西部地区の造成に当たり、開発予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて協議した。用地内には馬土手が存在し、昭和63年度に財団法人千葉県文化財センターによって発掘調査が実施されている⁽¹⁾。今回照会のあった馬土手1条を含む部分200m²については、当初保育園用地のため馬土手を保存する予定であったが、その後計画の変更により一般宅地として開発することになった。協議の結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなり、平成10年4月に発掘調査を実施した。

2 遺跡の位置と環境（第1図～第3図）

高柳新田所在馬土手(1)は、千葉県東葛飾郡沼南町高柳新田字メ切内160-2ほかに所在する。沼南町は千葉県の北西部に位置し、北側は手賀沼を挟んで我孫子市と接し、東側は印旛郡白井町・印西市と接する。また町内西部には手賀沼に注ぐ大津川が流れ、柏市との境界をなしている。遺跡の所在する高柳地区周辺は、町の南西部に当たり、柏市・松戸市・鎌ヶ谷市の市域が複雑に入り組んでいる。遺跡のある台地は、大津川に注ぐ二つの支谷に挟まれる舌状台地で、標高22～28mを測る。また、台地南東側縁辺部の中央には北西に向かって小支谷が入っている。遺跡は、台地上と、小支谷や台地南東側の縁辺及び斜面部に立地する。



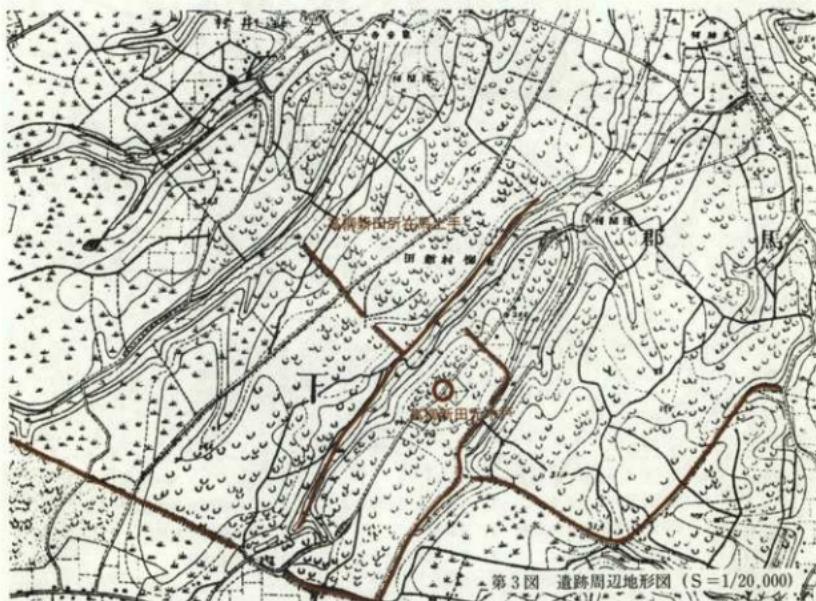
第1図 近世小金牧の範囲 ($S=1/40万$)

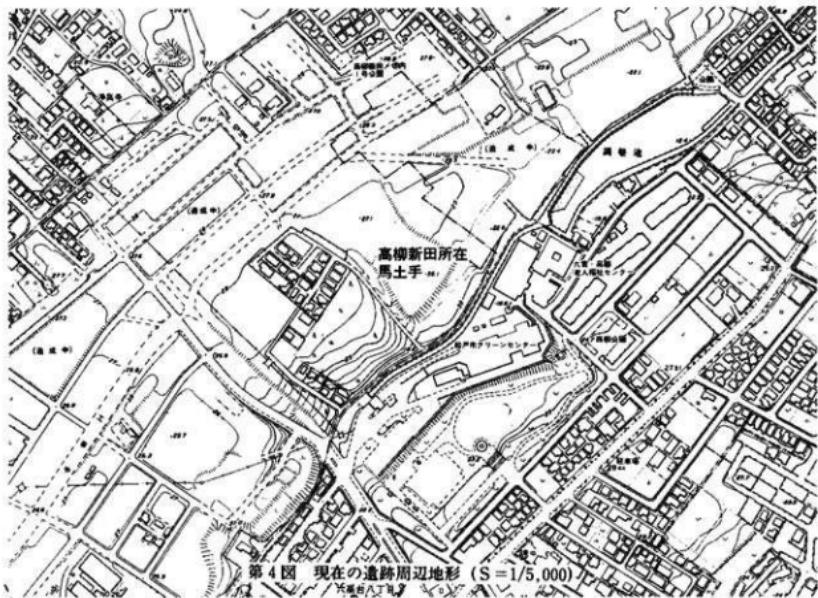


本遺跡の周辺には、松戸市貝塚⁽²⁾・子和清水貝塚⁽³⁾などをはじめ、旧石器時代から中世に至る数多くの遺跡が存在する。高柳地区周辺でも、中島込遺跡⁽⁴⁾・中島込第2遺跡⁽⁵⁾で縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の集落が調査されている。今回対象とした遺跡は近世の馬土手であるため、ここでは当該時期の遺跡に絞って概観することにする。

千葉県北部に広がる下総台地には、古代から牧が存在していたと推測される。戦国時代には千葉氏や後北条氏により下総牧が經營されていたようであるが、本格的に牧が整備されたのは江戸時代になってからである。近世下総牧には小金牧と佐倉牧があり、このうち小金牧は現在の東葛地域から印旛郡の一部にわたって展開していた。小金牧の内牧には高田台牧・上野牧・中野牧・下野牧・印西牧があり、本遺跡の馬土手は中野牧に所属する。なお、このほかに莊内牧（現野田市域）が存在していたが、享保年間に廃止されている。なお、県内の牧関係遺跡に関する詳細な分布調査が千葉県教育委員会によって実施されており、本書での牧域はその成果⁽⁶⁾によった。

本馬土手は、中野牧の東部に位置する。中野牧は主に松戸市の東部に展開しており、沼南町・柏市・鎌ヶ谷市的一部を含んでいる。中野牧に所属する馬土手の調査例としては、本馬土手をはじめ、数例が知られている。松戸市内の五香六実元山所在馬土手（2）と串崎新田東里所在馬土手（3）は、当センターが調査を実施した。元山所在馬土手は、土手の基底部幅が6m前後で、土手の高さは3m前後である⁽⁷⁾。これよりやや規模の小さい東里所在馬土手は堀を伴っている⁽⁸⁾。また、鎌ヶ谷市教育委員会によって鎌ヶ谷市中沢1484番地所在馬土手（4）が調査されている。この馬土手は遺存状態は不良であるものの、二重土手と堀を有することが確認された⁽⁹⁾。



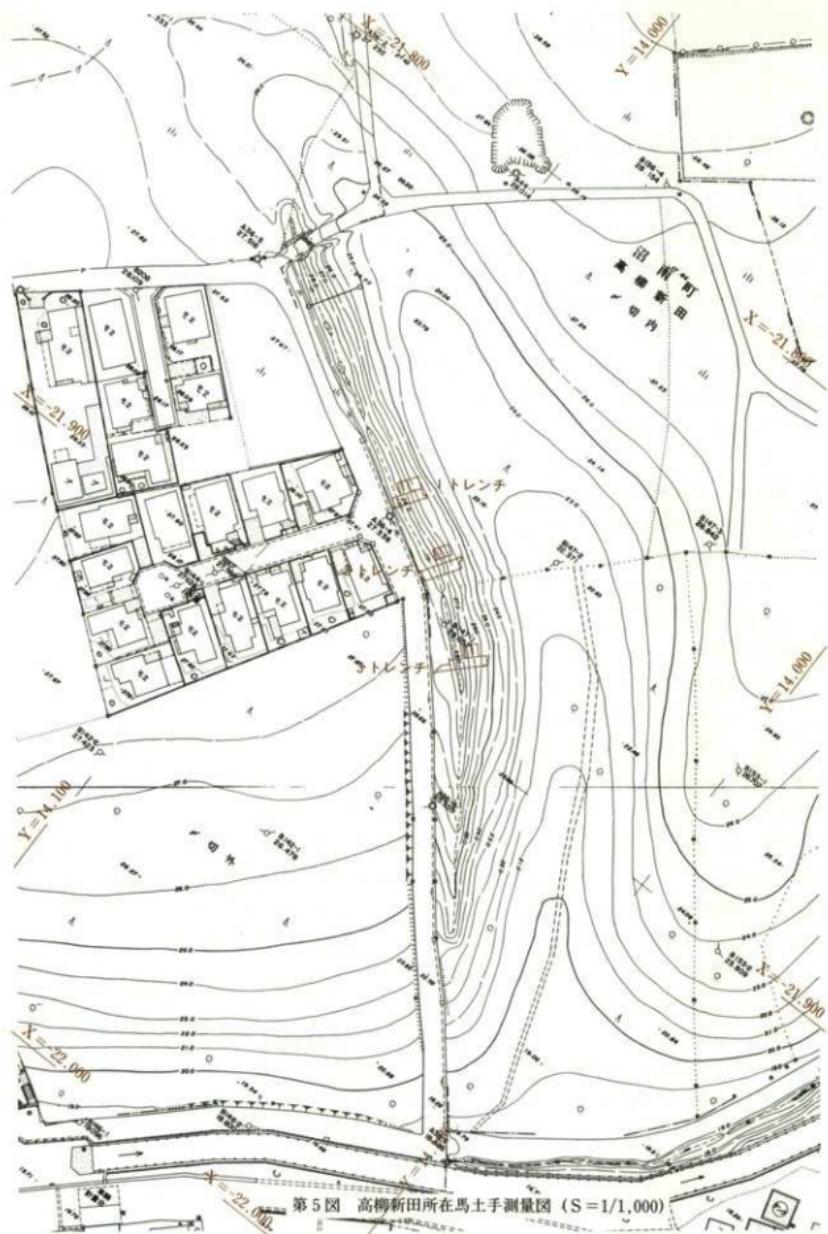


このほか牧に関連する遺跡として、木戸跡・込跡などがある。木戸は、馬の逃亡防止・通行人の人別改め等を目的に作られたもので、松戸市内の五助木戸(5)や高柳新田元木戸(6)などが知られている。込跡は、野馬を捕らえて選別・烙印したりするために作られた施設で、鎌ヶ谷市小金中野牧の込跡(7)は特に保存状態が良く、県指定史跡になっている。さらにこれらの牧施設等を管理する役所として金ヶ作陣屋跡(8)がある。この役所は享保年間に設置されたもので、中野牧・下野牧を管轄していた。また、松戸市お立場遺跡(9)は将軍鹿狩りの際に使用した塚である。

3 馬土手の現況（第4図・第5図）

今回調査対象となった馬土手は、昭和63年度（以下「前回」という。）の調査時に「野馬土手1」とされたものである⁽¹⁾。現在の遺跡周辺は開発が進んでおり、元の地形はわかりづらくなっている。既に前回の調査段階でも「野馬土手1」の北半部は土手が確認できない状態であったが、もとは土手を有していたことがトレンチ調査の結果や航空写真からうかがえる。また、馬土手南半部についても現状では造成工事の影響を受けており、土手北東側（以下便宜的に「東側」という。）で標高25m以下の地形は埋没していて確認できない。土手南西側（以下、便宜的に「西側」という。）でも一部削平を受けている。現状での土手の高さは現地表面から約2.3m～1mで、基底幅は6m前後を測る。立地でも触れたように支谷の縁辺部から斜面にかけて構築されているため、斜面側とその反対側では地表面の高さが異なっている。

- 注1 糸川道行 1989 「松戸市・沼南町高柳新田所在野馬土手」 財団法人千葉県文化財センター
- 2 岩崎卓也・関根孝夫ほか 1973 「貝の花貝塚」 松戸市教育委員会
- 3 岩崎卓也 1972 「子和清水 1972」 子和清水貝塚発掘調査団 ほか
- 4 平岡和夫 1981 「沼南町中島込遺跡調査報告」 沼南町教育委員会
- 5 渡辺健二ほか 1986 「中島込第二遺跡」 沼南町教育委員会
- 6 藤下昌信ほか 1986 「千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書」 千葉県教育庁文化課
- 7 鈴木定明 1983 「松戸市五香六実元山所在馬土手」 財団法人千葉県文化財センター
- 8 田村 隆・上守秀明ほか 1990 「松戸市野見塚遺跡・前原I遺跡・根之神台遺跡・中内遺跡・中峰遺跡・新橋台I遺跡・串崎新田東里所在野馬除土手」-北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書III- 財団法人千葉県文化財センター
- 9 犬塚俊雄 1990 「平成元年度 鎌ヶ谷市内遺跡群発掘調査概報」 鎌ヶ谷市教育委員会



II 調査の概要

1 調査の方法と経過（第5図）

前回の調査時に作成した馬土手の地形測量図をもとに、現地の状況を判断しながら2m幅のトレンチを3本設定した。馬土手の東側は既に一部造成工事の影響を受けていることから、トレンチの長さは現況で土手が確認できる範囲を中心とした。また、平面位置や標高の記録には国土地理院国家座標を基準とした。

発掘調査は4月6日から開始した。トレンチの掘削は、まず重機によって行い、地山まで掘り下げる土層の堆積状況を確認した。その結果すべてのトレンチにおいて、セクション面に溝とみられる落ち込みが観察されたため、溝の周囲を2m程度の長さまで拡張した。掘削は溝の肩付近のレベルにとどめて、平面プランの検出に努めた。1トレンチでは溝の覆土上面に硬化面が認められている。溝の発掘と平行しながら、土手盛土等のセクション観察・記録を行った。この後トレンチの位置記録、溝部分の平面図を作成し、4月20日にすべての現地作業を終了した。

2 各トレンチの概要（第6図・第7図）

各トレンチで述べる基本土層の内容は以下のとおりである。

(土手盛土) a層 暗褐色土ないし淡暗褐色土主体層

b層 黒色土主体層

c層 橙褐色土ないし褐色土主体層

(再堆積土) A層 暗褐色土ないし淡暗褐色土層、概して締まり・粘性強い

B層 褐色土層、締まり・粘性強い

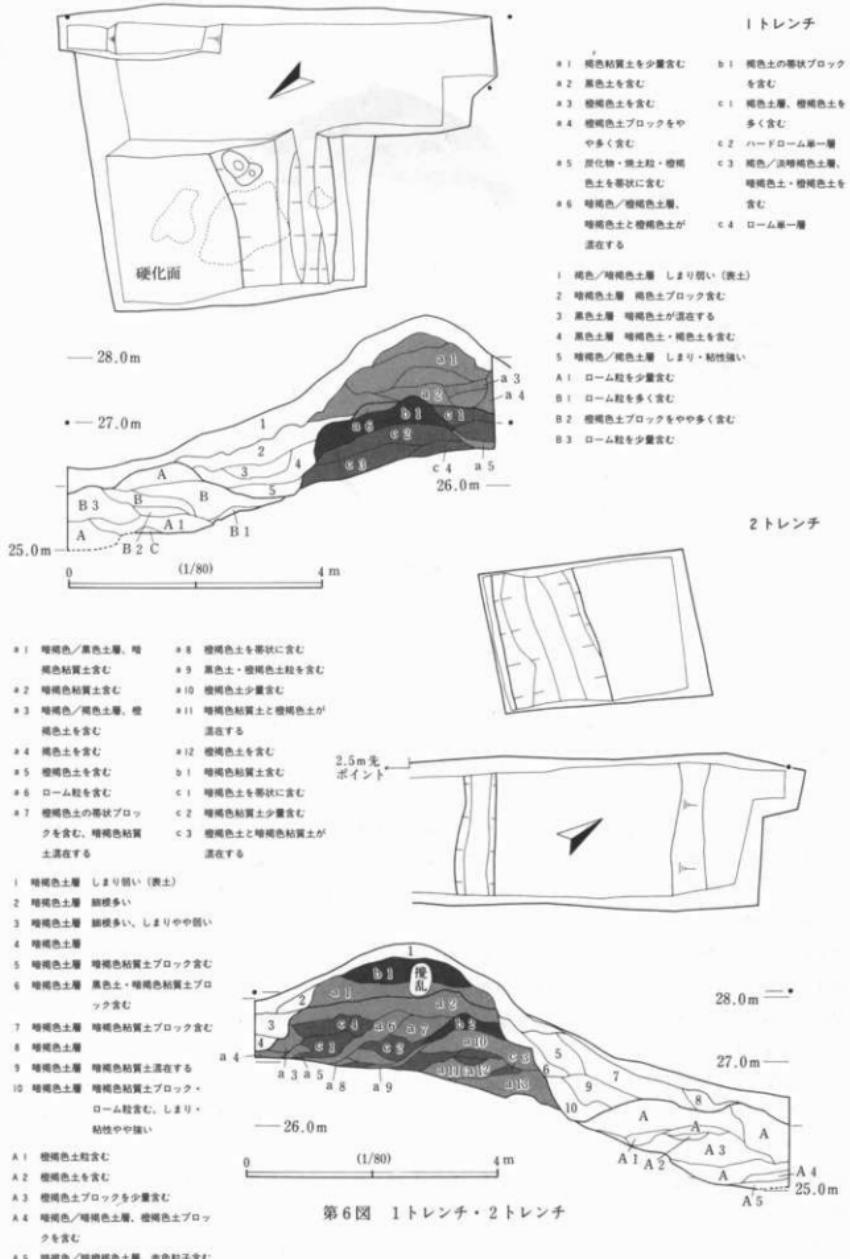
C層 橙褐色土層、概して締まり・粘性強い

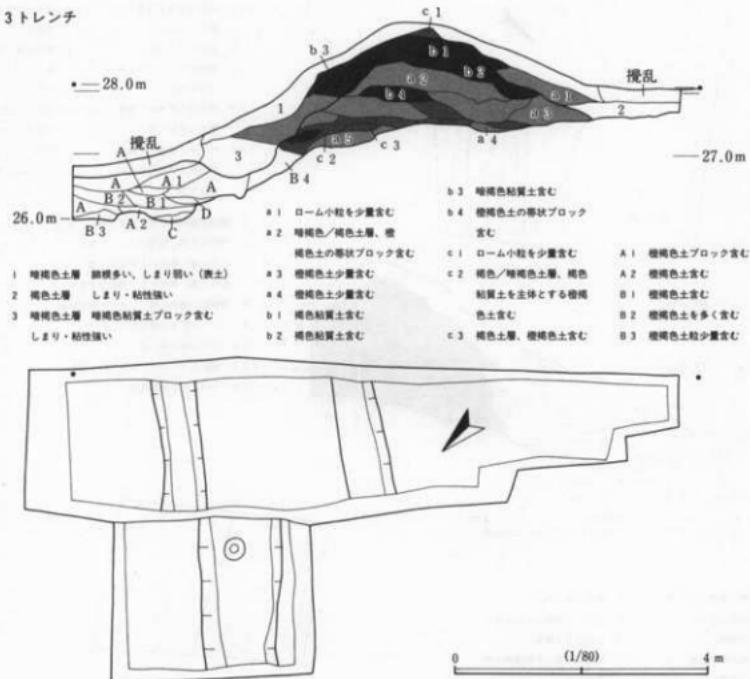
D層 黒色土層、締まり・粘性比較的強い

1トレンチ 今回調査区の最も北側に設定した長さ6mのトレンチである。馬土手頂部の西側は既に造成工事等により原地形が失われている。地山層は前回調査のDトレンチでみられた橙褐色のローム層である。盛土の構成は、黒色土主体層(b層)・橙褐色土主体層(c層)など概ね3層に分けられる点で前回調査の所見とほぼ一致する。ただし、今回は、前回の「暗褐色土を含む層」にかわり暗褐色土主体層(a層)を設定した。「暗褐色土」とされた土層は、今回の褐色土層ないし淡暗褐色土層に相当するものと思われる。これらの土層は、橙褐色土層の下部に堆積した地山層に由来するものであろう。

トレンチの断面には、溝とみられる落ち込みが確認された。そこで溝の平面プランを確認するため、溝の周囲をさらに2m北側に拡張した。溝は幅が1.4m~1.9mで、深さは土手側で約80cm、斜面側で45cmを測る。溝の覆土は暗褐色ないし黒色土層(2層~5層)で、地山を掘り込んだのではなく、土手の盛土(b1層~c3層)と、地山整形に伴う再堆積土を壁面としている。再堆積土には、暗褐色土ないし淡暗褐色土主体層(A層)・褐色土主体層(B層)・橙褐色土主体層(C層)が見られた。溝の平面プラン調査の際に、セクションで確認できなかった硬化面を検出した。覆土を除去すると、東側の壁面に直径30cm~40cm・深さ40cm~50cmのピットを検出した。また、斜面側の地山が一部検出不十分だったため、サブトレンチを入れたところ、地山を掘削した跡が認められた。

土手の構築方法については二段階の工程が指摘されており、本トレンチにおいても土手盛土は、a6層か





第7図 3 トレンチ

らc1層を結ぶラインで上下に分けられる。上層は暗褐色土主体の層で、締まりは比較的弱く自然堆積土と区別しにくい。下層は黒色土や地山由来の橙褐色土等を主体とする層で、締まりや粘性が強く、明らかに盛土とみられる層や地山と区別しにくい土層で構成される。ここで土手と溝の構築工程を復元してみる。まず第一段階の盛土をした後に、東側の再堆積土を壁面とする溝が造られた。さらに、セクションで判断する限り、この溝が埋まつた後に第二段階の盛土をしているようである。従って、連続的な工程で第二段階までの盛土がなされたのではなく、第一段階の盛土を修理・補強していった結果、最終的に現状の土手が形成されたものと考えられる。また、東側の溝は埋没した後に道として利用されていたことがうかがえる。出土遺物はない。

2 トレンチ ほぼ中央付近に設けた長さ 8 m のトレンチである。1 トレンチと同様に再堆積土を壁とする溝を検出した。また、これとは別にトレンチ中央の地山面で、a13層を覆土とする幅 50 cm ~ 60 cm の浅い溝が確認された。斜面下部では地山を削り出した跡が認められた。土手盛土はここでも二段階に分けられる。第一段階の盛土には特徴的な堆積が観察できる。まず a13 層を積み上げて平坦面を造り、その上に東の斜面側から土を盛つていったことがわかる。概ね水平堆積の盛土を数段積み上げるごとに、斜面堆積を示す間層が入っている。このうち b2 層は第一段階の盛土の中では唯一の黒色土層で、旧表土に由来する可能性が

高い。

盛土はほぼ一定のレベルまで積み上げており、c4層を盛った後、最後にa2層で全体を覆って整形しているようである。1トレンチでは土手盛土の幅は未確認であったが、本トレンチで盛土西側の限界を確認することができた。それによると、盛土の基底部幅は約4.6mで、第一段階の頂部すなわち第二段階基底部では3mを測る。

1トレンチから続く溝は、ここでは幅を減じて1.3m～1.5mを測る。深さは土手側で80cm、斜面側で25cm程度である。a13層を覆土とする溝は土手の肩（a2層・b2層東端）の位置とほぼ一致することから、土手の幅を規定する役割をもっていたものと思われる。出土遺物はない。

3トレンチ 今回調査区の最も南側に設定した長さ10mのトレンチである。他のトレンチに比べて、土層の堆積状況はやや漫然としており、盛土と再堆積土の区別や溝と盛土の関係も判然としない。2トレンチから続く土手脇の溝は、断面形がやや異なり底部が平坦になっている。そのため溝底部が地山まで達していないので、再堆積土中に掘り込んだかたちになっている。北側に拡張したところ、溝の幅は1.1m～1.3mとさらに細くなり、深さは20cm～30cmである。底部に直径30cm、深さ40cmのピットを検出した。これに対応する溝が、西側の既に造成された道路下にかつてあったとされている。本トレンチでの確認を期待していたが、断面を観察する限りでは土手の西側に溝を検出することはできなかった。2層の下は橙褐色土の地山であり、掘削の跡も認められない。

また、地表面には幅70cmの溝を2条検出した。このうち西側の溝は2トレンチで見た地割り線の役目を果たすものと考えてよいだろう。a5層を覆土とし、立ち上がりの残っていた西側で深さは約10cm前後である。この溝が盛土幅を規定するものであれば、盛土の東側はc2層までと考えられ、B4層以下を再堆積土とらえることができる。この場合、盛土の基底部幅は5mを測る。一方、東側の溝は地山整形の一環かもしれない。深さは西側で15cm～20cm、東側で5cm前後である。再堆積土の中には黒色土層（D層）も認められた。出土遺物はない。

III まとめ

今回の調査で得られた成果としては、まず土手の東側においてすべてのトレンチに溝が検出されたことである。幅や深さは各トレンチによりばらつきはあるが、規模等から言ってこの溝は野馬堀と考えられよう。前回調査のAトレンチからCトレンチで検出された野馬堀と関連するものであろうが、1トレンチから40m北方のDトレンチでは同種の溝は確認されていない⁽¹⁾。かつて土手の西側にも溝があったことを考え合わせると、「野馬土手1」は2条の野馬堀を有する馬土手であると言えるだろう。そしてこの野馬堀の構築方法は、台地上に当たる西側ではおそらく地山を掘り込んだものと思われ、台地斜面に当たる東側では地山由来の再堆積土を用いて堀の壁面としている。断面形はおおよそV字状で底部が先細りになるようだが、3トレンチでは平坦面が確認された。また隨所に小ピットを有しており、これがどういう性格のものはわからぬ。なお、1トレンチで硬化面が確認されたことから、野馬堀の機能を失った後に道として利用されていたことが考えられる。

ここで「野馬土手1」の野馬堀について整理してみる。北半部では土手の東側にのみ2条の堀を有し、南半部では土手の両側にそれぞれ1条の堀を設けているらしい。なお、南半部の東側の堀は北半部のものと連続せず、一旦途切れている。堀の規模は、北半部の溝001で幅2.8m～4.0mであるのに対し、南半部の堀は幅1.1m～1.9mと格差がある。

次に、土手盛土の幅を規定する地割り線を検出したことが成果としてあげられる。昭和63年度の調査でも、Dトレンチにおいて、地山のカッティングによって盛土幅を規定していたことが指摘されている。今回の調査例は溝という点で方法こそ違うものの、土手の盛土を計画的に行う工程の一端を明らかにすることことができた。

今回も遺物は全く発見されなかつたため、馬土手の時期を限定する新たな情報は得られなかつた。前回の調査の所見によれば、土手が比較的大規模である点から享保8年の牧改正以前の「古土手」⁽²⁾に比定される。

注1 糸川道行 1989 「松戸市・沼南町高柳新田所在馬土手」 財団法人千葉県文化財センター

2 松下邦夫 1982 「改訂新版 松戸の歴史案内」 塚土史出版 ほか





調査前全景1 (北から)



調査前全景2 (東から)



1 トレンチ断面





溝全景

2 トレンチ全景



拡張部溝

3 トレンチ全景

報告書抄録

ふりがな	しょうなんまちたかやなぎしんでんしょざいうまとて						
書名	沼南町高柳新田所在馬土手						
副書名	高柳西部地区埋蔵文化財調査報告書						
巻次							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第348集						
編著者名	沖松信隆						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番の2 ☎043-422-8811						
発行年月日	西暦1999年1月20日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村：遺跡番号					
高柳新田所在馬土手	千葉県東葛飾郡沼南町高柳新田字ノ内切内160-2ほか	305	004	35度48分10秒	139度58分45秒 19980406 19980420	200	高柳西部地区開発に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
高柳新田所在馬土手	牧跡	近世	馬土手 野馬堀	1条 1条	なし	2条の野馬堀を伴う馬土手。土手を盛り土する際の地割り線を検出した。	

千葉県文化財センター調査報告第348集

高柳新田所在馬土手
高柳西部地区埋蔵文化財調査報告書

平成11年1月20日発行

編集 財団法人 千葉県文化財センター

発行 住宅・都市整備公団千葉地域支社

千葉市美浜区中瀬1-3 幕張タクノガーデンD棟

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印刷 株式会社 エリート印刷

千葉市中央区市場町6-8 クリスタルいのはな023